

梁啓超の「新民」の理念

盧 守 助

要 旨

近代中国，由于西方的冲击，传统社会被破坏。如何使中国免遭西方侵略，走向富强，成为许多思想家共同关心的课题。这一时期，梁启超是最具代表性的人物。新民学说的提出，标志着梁启超的思想重点，已经从原来的改良主义向具有近代思想意义的国民的塑造转化，也代表了他一生中政治思想的最高峰。本文以梁启超的新民思想为研究对象，对新民思想的形成和发展以及内在的逻辑结构进行了探讨和分析。通过论证，本文得出这样的结论：文明观是新民思想的立论基础，独立精神是新民思想的出发点。其理论归结则是公德论，目的是通过改造国民，建设一个国家主义的新中国。新民思想是在特殊的历史背景下产生的，明治时期的文化是新民思想得以产生和发展的思想土壤。

キーワード……新民 文明 独立 公德 国家

はじめに

梁啓超は1898年9月21日、西太后のクーデターにより、日本に亡命した。その3ヶ月後の同年12月23日『清議報』は横浜で創刊した¹⁾。『清議報』は梁啓超が変法維新時代に発行していた『時務報』の延長と見ることができ、梁啓超ら維新派が変法維新運動を継続しようとしたものと考えられる²⁾。梁啓超は『清議報』の「『清議報』叙例」に発刊の趣旨を次のように記している。それは「一、支那の清議（政治に対する議論または政治人物に対する評論）を維持し、国民の正気を激発する。二、支那人の学識を増長する。三、支那と日本両国の声気を交通し、其の情誼を連ねる。四、東亜の學術を發明し、亜細亜文化の精髓を保存する」とされている³⁾。また、1901年12月21日付第100号に掲載された「『清議報』一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴」で、梁啓超は『清議報』について、「一に民権を提唱し、二に公理を広め、三に時局を明らかにし、四に国辱をすすぐことに励む。一言で言うならば、民の知恵を広め、民気を奮い起こす」ことであると述べている⁴⁾。その初志は「同志を聯合し共に『清議報』を興し、国民の耳目となし、維新の喉舌となす」ことであつた⁵⁾。

1902年2月8日『清議報』は停刊し、引き続き『新民叢報』が創刊された。梁啓超は『新民叢報』の趣旨を、「第一に本報は『大学』の民を新たにする義を取つたもので、我が国の維新のために、まず国民の維新に取り掛かる。中国不振の原因は国民の公德欠乏と知恵の不開にある

ので、本報はもっぱらこの病状に対して投薬し、中国と西洋の道徳を取って結合し徳育の方針として、政治学の理論を広範に網羅し、知育の根本とする。第二に本報は教育を主とし、政論を従とする。ただし今日世界の大勢は、国家主義の教育を重んじているので、政治について詳しくせざるを得ない。第三に本報は我が国の前途のために、すべて国民の公利公益を目的とする。漸進的に中国の進歩を導く」としている⁶⁾。梁啓超は『新民叢報』に「新民」に関する文章を連載した。

梁啓超の思想の変化は、3期に分けることができる。第一期（1890 - 1898年）は、西洋の衝撃により、中国の伝統的世界が崩壊し始めた時期である。この時期は、康有為と梁啓超を指導者とする維新派の変法が中心的課題であった。第二期（1898 - 1912年）は、戊戌変法失敗後、梁啓超の日本亡命期である。この時期、梁啓超の思想は、政治制度の変革から伝統的思想の変革に変わった。第三期（1912 - 1929年）は、梁啓超の思想は伝統に復帰した。

梁啓超の新民思想は、第二期の産物であり、おもに前述した『新民叢報』に掲載された「新民説」に表われている。「新民説」は、「論公德」、「論国家思想」、「論自尊」、「論私徳」、「論進取冒險」など20節から構成され、26回にわたって創刊号から第72号までに掲載された。その前後、梁啓超は数多くの論説を著した。それらは「新民説」には含まれてないが、「新民説」とある程度の関連性があり、新民思想の一部でもあった。新民思想に関する先行研究は少なくないが、大部分は「新民説」を研究対象としたものであり、一側面から研究を行ったものである。また、ほとんどの梁啓超研究者は、明治期の文化が梁啓超の新民思想の形成する土壌であるとしているが、この点についての検討はまだ不十分である。そこで本論では梁啓超の新民思想が形成された歴史的背景、その理論的構造、思想の転換及び当時の日本の思想家とどのようなつながりがあるかを考察する。

1. 新民思想の形成

歴史上中国は自らを「天朝上国」とみなしていた⁷⁾。長い間、中国にとって日本は「蕞爾三島」であった⁸⁾。中国は日本を見下していたのである。しかし、日清戦争での日本に対する惨敗は、中国を「天朝上国」の夢から覚醒させ、当時中国が世界でいかなる地位を占めているかを中国人に再考させた。日清戦争の敗北は、「公車上書」運動を誘発し、変法維新運動が行われた⁹⁾。日本は、一転して変法維新のモデルとなったのである。戊戌変法失敗後、梁啓超は日本に亡命した。この点について、アメリカ学者張灝は次のように述べている。日本は彼に理想的な環境を与えた、彼は日本語を早く習得したので、新思想を摂取できた、彼の思想はこれにまで豊かになった¹⁰⁾。張灝は、日本の環境が梁啓超の思想形成に大きな影響を与えたとしているが、この時期の梁啓超の思想とその変化に言及しているわけではない。しかし梁啓超当時の日本の思想が大きな影響を与えたという事実を無視した場合には、梁啓超の思想の変容の過程を

示すことはできないだけでなく、梁啓超思想の検討において根拠のない解釈を招く可能性が生じるであろう。西洋文明は中国の目標であった。しかし中国と西洋の間には、同じくアジアに位置する日本が存在した。日本は、中国が西洋思想を受容する際の媒介の役割を演じた。梁啓超は西洋思想を同時代のいかなる中国人よりもよく吸収した。そして政治思想にも、学術思想にも、日本が深い影響を深く与えている。近代中国に巨大な影響を与えた彼の「新民」思想についても例外ではない。

(1) 新民思想発生の社会環境

梁啓超は日本政府の助力によって危地から抜け出した¹¹⁾。そして日本政府は梁啓超等の日本滞在を援助した¹²⁾。日本の政府や世論は梁啓超等に同情を寄せたが、彼らの行動が急進的な変革であるとは認めなかった。例えば伊藤博文は次のように述べる。康有為と梁啓超の維新党に、いわゆる革新党のなすことを観察して、その計画はすべて適当であるとは言えない、これが成功することはないとした。果たして、3カ月以内にこの党は敗れた、速く進めば、速く後退するのは、当然の理である、数千年に涉って受け継いだ文物制度および風俗を急いで改めて新しくするのは、一朝一夕にできるものではない、と述べている¹³⁾。また「百日維新」の最盛期の1898年に伊藤博文が訪中した時に、彼の名を慕って面会した「通芸学堂」(後に京師大学堂の一部となる)の学生たちに、彼は一国の維新変革は幾多の困難と挫折とを乗り越ってはじめて成果を収めることができる、諸君にはこんなにも愛国心がある、よろしく自重してほしい、と言ったとされている¹⁴⁾。伊藤博文の考え方について、彭沢周は、伊藤は急進的な維新変革に賛成しなかったであろう、伊藤の維新変革の段取りは漸進的であり、穏健な方法で問題を順次解決してきた、決して一挙にすべてのことをなしたわけではない、これは明治維新の歴史によって裏付けられる、とする¹⁵⁾。

梁啓超は、日本亡命後、日本政府とイギリス政府の力を借りて光緒皇帝の復権を図り、変法維新の目的を達成しようと考えていた¹⁶⁾。したがってこうした日本の政治家の態度と世論は彼にとって意外なものであった。梁啓超は1899年『清議報』に「政変原因答客難」を掲載し、なぜ急進的な変革を行うのかを説明している。彼は、「日本を例として言えば、幕末藩士は、みな急劇的な人である」、「こうした急劇的な人がいなければ、どうして日本の維新が成功することができたであろうか」、「まして今日の中国の積弊は、日本の幕末より、さらに深刻であり、内憂外患の深刻さも日本の百倍にあってはなおさらのことである」¹⁷⁾。しかし彼と康有為が組織した光緒帝復権活動は自立軍の蜂起の失敗をもって終わった。前述したように『新民叢報』の趣旨には「漸進的に中国の進歩を導く」とされているが、これは伊藤博文らの考え方に賛同したものであると考えられる。

(2) 新民思想の形成と明治文化

『新民叢報』の創刊について、狭間直樹は、「『新民説』は、梁啓超が横浜で刊行した『新民叢報』誌上に掲載された。というより、梁は『新民説』を発表すべく該誌を創刊したのである」とする¹⁸⁾。たしかにその通りであるが、しかし『清議報』後期に、梁啓超の新民思想はすでに芽生えていたといえる。「自由書」中の「文野三界之別」一節及び「国民十大元氣」、「十種徳性相反相成義」がその例である。新民思想の形成は、梁啓超の政治制度の変革から思想の変革へ転換したことを示している。つまり、梁啓超はすでに真の変革は根本から行われる必要があり、それはすなわち国民の性質を改造することであるという認識である。これは梁啓超の思想発展における重要なマーカーであると言える。ところで、この思想の形成と展開には、明治期の文化背景が深く関わっていたと考えられる。来日したばかりに、梁啓超は明治期日本の西洋思想受容の成果に賛嘆して、彼は次のように主張している。日本人はほぼ西洋の各分野における重要な書籍を翻訳した、我々はその成果を活用するのである、これは西洋人を牛とし日本人を農夫として、そして我々が座して彼らの成果を食べるようなものである、千万金を費やせずに、すべての重要な書籍を集めることができる¹⁹⁾。彼は、「日本は維新から三十年以来、広く世界中に知識を求めて、訳された有用な書籍は少なくとも数千種類になり、とりわけ政治学、経済学、哲学、社会学などに関する書籍が豊かであって、いずれも大衆の蒙を開き、国の基礎を強化する当面の急務に関するものである」と述べている²⁰⁾。

梁啓超は、西洋の学問と思想が伝えられた日本を中国が西洋化する手段とすることを考えていた。彼は中国人に日本語学習を呼びかけたが²¹⁾、それは日本語が西洋言語よりも習得が早く効果が期待できるからであった。彼は、新しく外国語を習得するのは、新しく植民地を得るのと同じであるが、新植民地を得ても、移民しなければ、やはり役に立たない土地である、外国語に精通しても、その書籍を読まなければ、ただ一羽のインコである、我が中国では、英語を重視してすでに数十年が経って、これに精通した人は増えたが、嚴幼陵（嚴復）を除いて、西洋の学術思想を中国に輸入することができる人はだれもいない、他の人々は中国の学問が欠如しているだけではなく、西洋の学問もまた不十分である、西洋の学問を中国への輸入するには日本の書籍を読む人を頼りにしなければならない、これは中国の不幸であるが、「東学」を通じて、「西学」を治めることができるのは、不幸中の幸いである、と述べている²²⁾。

(3) 新民の前提 国民の性質への批判

張灝は「梁啓超が滞在している日本は、明らかにさまざまな面で彼の思想観点到に影響を与えた。なぜならば彼は明治日本の社会と政治の発展を近くから観察したためである」と言う²³⁾。たしかに、明治維新が成功した日本の社会と政治の新気風は梁啓超に直感的に好印象を与えた。晩年の回顧で、彼は「戊戌日本に亡命したとき、直接に新しい国を興すことを目撃するのは、弘暁の風を呼吸するように、頭がすっきりと気分が良くなった。自分の目で見て、日本朝野

の士大夫ないしもろもろの職人は、みんな楽観的で、活気があり、一所懸命で、千年来世に知られなかった国が新世紀の文明の舞台に出た。祖国満清政府の没落腐敗、病みつかれだらしくきたない様子と比べてみると、さらに日本人は敬愛すべきである」とほめたたえた²⁴⁾。明治維新成功後の活気にあふれ栄えている日本を見ることで、梁啓超は改めて中国社会の現状を認識し、制度以外に中国の衰弱していった原因を探さざるを得なかった。「中国積弱溯源論」では、「一は、奴隷根性」、「二は、愚昧」、「三は、利己」、「四は、偽りを好む」、「五は、臆病」、「六は、動かない」として中国国民の性質を6箇条に概括した²⁵⁾。この文章は1901年4月29日から同年7月6日にかけて、『清議報』に連載された(『清議報』第77-84冊)。後に、「論中国国民之品格」(1903年3月)で、再び中国の国民の性質を、「愛国心が薄い」、「独立性がない」、「公共心の欠乏」と批判した²⁶⁾。そこでは「奴隷根性」や「利己」等の言葉に代えて、「独立性」、「公共心」等の新しい言葉を用い、彼の思想はすでに新しく変化したとした²⁷⁾。彼は、「独立性」、「公共心」、「自治力」が国民になる不可欠な道德要素だけではなく、一国の精神の所在だと考えた。しかし現実、中国は「秩序なく、法律のない国」であり、中国国民は「放埒で、法律を守らない国民である」、こうした国民がいるならば、外国の侵略にあうのは当然のことである、とする²⁸⁾。このように、梁啓超は中国が国家を富強にしようとするならば、国民の性質を改造しなければならず、新民(民を新たにする)はその方法であると考えていた。

2. 新民思想の展開

『新民叢報』創刊号で、梁啓超は改めて「民を新たにする」理由を「国家に国民がいるのは、まるで身に四肢や五臓や筋肉や血管があるようである。四肢がすでに断ち切れ、五臓が病気になり、筋肉が傷つけられ、血管が涸れてきたときには、身はもう存在できない。同じように、その国民が愚昧で臆病であり、散漫、無法であるときには、国は建てられない。長生きをしようと思えば、摂生法を明らかにしなければならない。其の国が富み栄えて強国となるときには新民の方法を言わなければならない」と説明し²⁹⁾、「新民」の概念を打ち出した。「新民」は経書『大学』の重要な概念であり、国家と社会を治める核心は道德修養と民の革新であるという思想が含まれている。だが梁啓超の場合、「新」の概念には微妙に変化している。「積新民之義」において、彼は「新には2つの意味がある。一はその固有のものを高めて新たにすることであり、二は本来ないものを採って補って、新たにすることである」と述べている³⁰⁾。「固有のものを高めて新たにする」とは、固有の伝統的文化と精神を發揮することであり、それは「民族主義の根底と源」である³¹⁾。「その本来ないものを採って補う」とは、「広く各国民族の自立の所以を考察し、その長所を集めて採って、我が国の及ばないものを補う」ことである³²⁾。また「およそ新しい国民を作ろうと思えば、その国古来の誤った理想を打ち破らなければならず、それによって、その国民の頭を変化させるのである。この目的を達成しようと思えば、つねに他社

会の事物と理論を借りて、輸入して調和することが必要だ」と述べている³³⁾。彼の言う各国の「長所を集めて採」と「他社会の事物と理論を借り」ることは、西洋文明を対象にしていた。

(1) 新民思想の理論的基礎 文明観

数多い明治の思想家の中で、梁啓超は福沢諭吉を極めて推賞し重視していた。『新民叢報』第1号で、福沢諭吉を「もっぱら西洋の文明思想を輸入することを主義とした。日本人が西学のあることを知ったのは、福沢に始まる。またその維新改革の事業も、六、七割がたは福沢に依拠したものである」と評価している³⁴⁾。福沢諭吉は加藤弘之とともに明治の啓蒙思想家の双壁であり、『学問のすすめ』と『文明論之概略』は、指導的思想家としての彼の地位を不動のものにしたとされる³⁵⁾。『文明論之概略』で、福沢は人類の文明進化のプロセスを「野蛮」、「半開」、「文明」という3つの段階に分けた³⁶⁾。さらに「我国の文明と彼の国の文明とを比較するに、其外形に見はれたる技術工芸の彼に及ばざるは固より論を俟たず、人心の内部に至るまでも其趣を異にせり。西洋諸国の人民は智力活発にして、身躬からよく其身を制し、其人間の交際は整齊にして事物に順序を備へ、大は一国の経済より小は一家一身の処分に至るまで、迨も今の有様にては我日本人企て及ぶ所に非ざるなり。概して云へば、西洋諸国は文明にして我日本は未だ文明に至らざること、今日に至て初て明にして、人の心に於て之を許さざるものなし」と述べている³⁷⁾。ただし、福沢は、世界は絶え間なく変化し発展しており、野蛮から半開、さらに半開から文明に至るのは、人類の発展において必ず通らなければならない道であると考えた。そして「苟も一国文明の進歩を謀るものは欧羅巴の文明を目的として議論の本位を定め、この本位に拠て事物の利害得失を談ぜざる可らず」と述べている³⁸⁾。福沢はまた「文明には外に見はるる事物と内に存する精神と二様の区別あり。外の文明はこれを取るに易く、内の文明はこれを求むるに難し」と述べている³⁹⁾。福沢の言う「外の文明」とは、「衣服飲食機械住居より政令法律等に至るまで都て耳目以て聞見す可きもの」のであった⁴⁰⁾。福沢は文明の精神を「人民の気風即是なり」とする⁴¹⁾。しかし、「人民の気風を一変する」ことは「一朝一夕の偶然に由て功を奏す可きに」ことではない⁴²⁾。福沢は日本の文明化の順序を「欧羅巴の文明を求めるには難を先にして易を後にし、先づ人心を改革して次で政令に及ぼし、終に有形の物に至る可し。此順序に従へば、事を行ふは難し雖ども、実の妨碍なくして達す可きの路あり。此順序を倒にすれば、事は易きに似たれども、其路忽ち閉塞し、恰も墻壁の前に立つが如くして寸歩を進ること能はず、或は其壁前に躊躇する歟、或は寸を進めんとし却て激しく尺を退くることある可し」と述べている⁴³⁾。

前に述べたように、梁啓超の「文野三界之別」及び「国民十大元氣論」は、彼の新民思想が萌芽した文章と見なすことができよう。「文野三界之別」で、梁啓超ははじめて正式に「文明」と「野蛮」という言葉で人類を区分し、「西洋の学者は世界の人類を三級に区分して、一は野蛮の人であり、二は半開の人であり、三は文明の人である」と述べている⁴⁴⁾。彼の文明観が福沢

諭吉の影響を受けていたことは明らかである。「国民十大元氣論」の「叙例」で、梁啓超は「文明」について、「文明というのは、形質のものあり、精神のものもある。形質の文明を求めるとはやさしく、精神の文明を求めるとは難しい。精神をすでに備えている以上、形質は自動的に生じる。精神がなければ、形質は依存するところも失う。真の文明は、ただ精神だけである」と述べている⁴⁵⁾。さらに梁啓超は、西洋文明の吸収を「形質」から着手するならば必ず行き詰り、「精神」から着手してこそ、はじめて効果を得られるとする⁴⁶⁾。梁啓超の文明観は福沢諭吉の思想を受け入れたものであった。梁啓超は「精神」を「国民の元氣」であるとしているが、その結論も福沢諭吉の考えと同じであった⁴⁷⁾。ちなみに、「国民十大元氣論」という文章は『清議報』に掲載された時には、「一名文明之精神」という副題がつけられていた。福沢の文明観の受容は、梁啓超の新民思想の形成を促したのである。

(2) 新民思想の出発点 独立精神

「福翁自伝」において、福沢諭吉は「儒教主義と西洋の文明主義と比較してみるに、東洋になきものは、有形に於て数理学と、無形に於て独立心と、此二点である」とした⁴⁸⁾。彼の言った数理学は物理学である。彼は、「欧州近時の文明は皆この物理学より出でざるはなし」と述べている⁴⁹⁾。つまり福沢は西洋文明の精髓が科学的精神と独立精神にあると考えている。独立について、福沢は、「独立は単に肉体のみに非ずして精神の独立こそ更らに大切なれ。衣食足りて独立成ると云ふが如きは断じて許す可らず。抑も人を万物の靈と云ふは何ぞや。人間を天地間の万物に比較して、就中その精神を禽獣の心に比較して、一種特別靈妙不思議の点あるがなり」とする⁵⁰⁾。他方個人的独立はただの方法であり、国家の独立を図るのはその目的であるとして、「今の日本国人を文明に進るは此国の独立を保たんがためのみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明は此目的に達するの術なり」と述べている⁵¹⁾。さらに福沢諭吉は、「一身独立して一国独立するとはこのことなり」と結論付ける⁵²⁾。

福沢諭吉の文明理論において、梁啓超に最も強く影響を与えたのは独立思想である。1903年、彼は「新民説・独立論」において、「人間は禽獣と異なるものであり、文明の人は野蛮の人と異なるものである」と述べている⁵³⁾。また「人間とするには、独立できなければ、奴隷と言われ、民法上公民と認められない。国とするには、独立できなければ、従属国と言われ、公法上公国と認められない」⁵⁴⁾として、中国が独立した国になれないのは、おもにその国民には独立精神が欠乏しているからであり、これも国家が腐って衰微してきた根源であるとし⁵⁵⁾、「今日中国を救おうとするなら、独立を提唱しなければならない」と述べている⁵⁶⁾。後の「新民説」には「独立」をタイトルとした節はないが、「論自尊」がある。自尊と独立は共通性のある概念であり、梁啓超の場合には、「自尊があるかどうかは、ほんとうに自由民と奴隷とを区別する大事な瀬戸際であり」⁵⁷⁾、国なるものは、民を積みてなり、「故に国家の自尊を求めようと願うならば、先ず国民みな自尊を始めなければならない」とされているように、独立と自尊は同じものであ

ると考えられている⁵⁸⁾。ほかに、梁啓超は『新民叢報』に、福沢諭吉の「修身要領」を「慶応義塾講師演釈福沢先生独立自尊之義十四条」というタイトルで掲載した⁵⁹⁾。福沢と同じように、梁啓超は個人の独立を通じて、国家の独立の実現を望んだのである。

3. 新民思想の理論的帰結 公德論

「独立」も「自尊」も、個人あるいは国家の不可欠な要素であるが、すべてではない。梁啓超は個人的独立はただ国家独立の前提であり、「合群」(団結)してこそはじめて個人的独立の役割を果たせるという。これにもとづいて、梁啓超はまた「独立はすべての独立の人を集めて、その団体を強くすることであり、団体を破って、それぞれ独立になることではない。人々が他人を頼りにしないのは、人々が互いに協力しないことではない」⁶⁰⁾と述べ、生存競争と自然淘汰の法則によって、個人について言えば、合群してこそはじめて生存でき、国家は、合群の力が強ければ強いほど、競争力が強いと述べている⁶¹⁾。また「論合群」ではこれを「公共観念」とし、「まことに公共観念がある人は、つねにその私益の一部を犠牲にすることを惜しまずに公益を守る。甚だしい場合には、その現在のすべての私益を犠牲にし、将来の公益を擁護する」とする⁶²⁾。彼は、道徳について、「道徳の実体は1つのみであるが、外にあらわすと、公と私の名称が出て来る。人々が個人の道徳修養のみに専念するのは、私徳と言われ、人々がその団体を利するのは、公德と言われる。両者はみな不可欠なものである。私徳がなければ、人となれない。無数に人格の低劣、残忍、愚昧、臆病である人を集めても、やはり国を立てることができない。公德がなければ、団結することはできない。無数の自愛自制、清廉慎重善良の人がいても、やはり国を立てることができない」と述べている⁶³⁾。そして、昔から中国の道徳は発達しているが、それは私徳に偏重していて、例えば『論語』の「温良恭儉讓」などは個人の道徳修養の範囲に属しており、現在の中国人に欠けているのは、公德であると述べている⁶⁴⁾。さらにある寓話を例に、「ある役人が死んだ後、閻魔は彼の罪を問う。その魂は、『私は無罪です。私は役人を担当したうちに、とても清廉でした』と言う。閻魔は、『人形を官庁に立てるなら、水も飲まず、お前より一段優れているではないか。清廉以外に何も有益なことをやらなかったのは、お前の罪だ』と答える」とする⁶⁵⁾。梁啓超がこの例をあげたのは、ただ個人の良い道徳修養だけではまだ不十分であり、「群」に対してなすべき務めを尽くさなければならないと強調したからである。さらに彼は、「公德は、諸国を立てる根本である。『群』に有益であれば、『善』であり、『群』に無益であれば、『悪』である」と述べている⁶⁶⁾。これにより、「公德のあることを知れば、新道徳が出てきて、新しい民が出て来る」という結論に達する⁶⁷⁾。

こうした思想は梁啓超独自の発明ではなく、福沢諭吉の思想を祖述したものである。公德と私徳について、福沢は、「徳とは徳義と云ふことにて、西洋の語にて『モラル』と云ふ。『モラル』とは心の行儀と云ふことなり。一人の心の内に慊くして屋漏に愧ざるものなり。智とは

智恵と云ふことにて、西洋の語にて『インテレクト』と云ふ。事物を考へ事物を解し事物を合点する働なり。又此徳義にも智恵にも各二様の別ありて、第一貞実、潔白、謙遜、律儀等の如き一心の内に属するものを私徳と云ひ、第二廉恥、公平、正中、勇強等の如き外物に接して人間の交際上に見はるる所の働を公德と名く。又第三に物の理を究めて之に应ずる働を私智と名け、第四に人事の軽重大小を分別し軽小を後にして重大を先にし其時節と場所とを察するの働を公智と云ふ。故に私智或は私智或は之を工夫の小智と云ふも可なり。公智或は之を聡明の大智と云ふも可なり」とする⁶⁸⁾。福沢は「私徳」と「公德」、「私智」と「公智」を区別する。さらに、「徳義は一人の行状にて其功能の及ぶ所狭く、智恵は人に伝ること速やかにして其及ぶ所広し、徳義の事は開闢の初より既に定て進歩す可らず、智恵の働は日に進て際限あることなし⁶⁹⁾、「故に徳の分量は仮令ひ我国に不足することあるも焦眉の急須に非ざること明なり。智恵の事は全く之に異なり。日本人の智恵と西洋人の智恵とを比較すれば、文学技術商売工業、最大の事より最小の事に至るまで、一より計へて百に至るも又千に至るも、一として彼の右に出るものあらず」、「是に由て之を觀れば、方今我邦至急の求は智恵に非ずして何ぞや」と述べている⁷⁰⁾。

梁啓超は福沢諭吉の「公德」と「私徳」に関する思想を吸収したが、福沢諭吉の言う「公智」と「私智」を道德の内に入れた。文明は福沢諭吉の追求した目標である。福沢は道德が高尚であれば文明であるという考え方を認めず、そうでなければ「天下の人皆陋巷に居て水を飲む顔回の如くならん」⁷¹⁾、「唯其よく文明を進るものを以て、利と為し得と為し、其これを却せしむるものを以て害と為し失と為すのみ」と述べている⁷²⁾。もちろん福沢諭吉は道德に反対したわけではなく、智恵の社会あるいは文明に対する役割を強調している。福沢は例をあげて、「一度物理を發明してこれを人に告れば、忽ち一国の人心を動かし、或いは其發明の大なるに至ては、一人の力、よく全世界の面を一変することあり。『ゼイムス・ワット』蒸気機関を工夫して世界中の工業これがために其趣を一変し、『アダム・スミス』經濟の定則を發明して世界中の商売これがために面目を改めり」と説明する⁷³⁾。比較して言えば、福沢諭吉は、「徳義」の「功能」は「甚だ狭し」と考えている⁷⁴⁾。

福沢諭吉と比べると、梁啓超ははるかに道德を重視する。「敬告留学生諸君」で、彼は、「私は今日中国は智恵がないだけではなく、道德がないと考えている。政府は日々維新を言ったが、結局効果を収められないのは、まさに道德がないからである。民間は日々国を救うことを言ったが、結局救われないのは、まさに道德がないからである。今日諸君の天職は、国家政治の基礎を立てることだけではなく、社会道德の基礎を立てることである」と述べている⁷⁵⁾。梁啓超が積極的に「公德」を提唱する趣旨は、「一種の新しい道德を發明し、新しい国民を養成するところにある⁷⁶⁾。しかし、道德の定義が何であるかを梁啓超ははっきり言えなく、最終的に「社会倫理」と「国家倫理」に帰結するだけである。そのために、彼の「公德」論における論理は厳密ではないと言える。

4. 新民思想の目的 「内治」と「外交」

梁啓超が「古今中外の思想を斟酌して、一種の新しい道徳を發明し提唱」した理由は、国民の性質を改造することにあつた⁷⁷⁾。その目的は2つであつた。1つは「内治」であり、もう1つは「外交」である。これらは当時の中国の急務であり、また新民思想立論の根柢でもあつた⁷⁸⁾。梁啓超の言う「内治」とは、国民と政府との関係である。彼は国民を根に、政府を果実にとたとえ、すべての官僚が民間から来るのは、果実が根から来るようなものであり、国家の強弱はその国民が醸成するものである⁷⁹⁾。中国の政治腐敗と維新が成功できない理由はその国民の文明程度がきわめて低いからであり、「このような民をもって、このような政府を得るのは、あたかもウリを植えればウリがなることのようなのである」と述べ、そしてこのような国民がいれば、良い政府があつても、何の役にも立たないと述べている⁸⁰⁾。そのために、梁啓超は例をあげて、「ナポレオンは世にも稀なる英雄であるが、もしも彼に満清の兵士を授ければ、野蛮な黒人でも敵することはできない」と述べている⁸¹⁾。

この点については、福沢諭吉も論述している。福沢は、「西洋の諺に愚民の上に苛き政府とはこのことなり。こは政府の苛きにあらず、愚民の自ら招く災なり。愚民の上に苛き政府あれば、良民の上には良き政府あるの理なり」と述べ⁸²⁾、また中国を例として、「今『ワシントン』を以て支那の皇帝と爲し、『ウエルリントン』を以て其將軍と爲し、支那の軍勢を率ひて英国の兵隊と戦ふことあれば、其勝敗如何なる可きや。仮令ひ支那に鉄艦大砲の盛あるも、英の火繩筒と帆前船のために打破らる可し。是に因て觀れば、戦の勝敗は將帥にも因らず、亦機械にも因らず、唯人民一般の氣力に在るのみ」と述べている⁸³⁾。政府と人民の関係について、福沢諭吉は「蒸気船」と「航海者」にたとえて、「人の巧を以て機関の本然になき力を造るの理は万々ある可らず。世の治乱興廢も亦斯の如し。其大勢の動くに當て、二、三の人物国政を執り天下の人心を動かさんとするも決して行はる可きことに非ず」、「古より英雄豪傑の世に事を成したりと云ふは、其人の技術を以て人民の智徳を進めたるに非ず、唯其智徳の進歩に當てこれを妨げざりしのみ」と述べている⁸⁴⁾。福沢諭吉は政府と人民とははっきり対立するわけではないと考えて、「文明は人間の約束なれば、之を達すること固より人間の目的なり。其これを達するの際に當て各職分なかる可らず。政府は事物の順序を司どりて現在の処置を施し、学者は前後に注意して未来を謀り、工商は私の業を営て自ら国の富を致す等、各職分を分て文明の一局を勤めるものなり」と述べる⁸⁵⁾。梁啓超は福沢諭吉の「愚民の上に苛き政府とはこのことなり」という考え方を受け継いだが、結論において、両者の立場は同じではない。梁啓超の場合、国民と政府とは全く対立するものであり、その関係はあたかも寒暖計と気温のようであつて、寒暖計が直接気温を反映するように、良い政府と良い政治制度があるかどうかは、全く国民に決定づけられる。これにより、「もしも新しい国民がいれば、必ず新制度があり、新政府があり、新国家がある」として、「新民」のもう1つの意味は国民が自ら新たにすることであると述べている⁸⁶⁾。

梁啓超の言う「外交」とは、現代的な「外交」の概念ではなく、中国がいかに国体を保ち西洋列強と競うかということであり、ときに「外競」とも言われる。梁啓超は、「新民説」の「叙論」で、世界中に百十力国があるが、世界を左右できる国は四、五力国だけであり、これらの国が強大なのは、完全に民族主義によって造られたからであるとし、民族主義について「各地同種族、同言語、同宗教、同風俗の人々を互いに同胞と見なし、独立自治に努めて、完備した政府を組織し、公益を謀り、他種族に抵抗するものである」と述べている⁸⁷⁾。民族主義は、ほんとうに近代国家の原動力であり⁸⁸⁾、国民の実力が強くなると、必ず外にその勢力を拡張して、民族帝国となる。梁啓超はこれを「新主義」と言う。彼は、ロシアの満州占拠、ドイツの山東省占拠、イギリスの揚子江流域占拠、フランスの広西省・広東省占拠、日本の福建省占拠を例に挙げて、これらはすべてこの新主義の必然的結果であると述べている⁸⁹⁾。梁啓超はこれが競争の結果であると認め、「競争は文明の母であり、競争が一日でも止まるならば文明の進歩もたちどころに止まってしまう」、競争の最高次は国と国の間の競争であると述べている⁹⁰⁾。そのため、彼は今日列強の民族帝国主義に抵抗しようとするならば、その方法が同様に中国で民族主義を押し広めるのであると述べる⁹¹⁾。

梁啓超は新民思想の立論の根拠を「内治」と「外交」に分けているが、その最終の目的は、中国の民族主義をもって列強の民族帝国主義に抵抗することであった。梁啓超が「内治」について論述する時、その出発点は個人の独立であるが、彼が強調するのは「合群（団結する）の独立」である。彼は、人間は他人の奴隷となつてはいけなけれども、「群」（団体）の奴隷とならなければならない、もしある特定の「群」の奴隷とならないのなら、結局必ず他の「群」の奴隷となるに違いないとする⁹²⁾。そのため、梁啓超は団体に対する個人の義務を強調する。彼は「十種徳性相反相成義」の第4節で、もっぱら「利己」と「愛他」を論述して、真に利己すれば、必ず先ず「群」を利して、そうしてはじめて自己の利益を守ることができると述べている⁹³⁾。また特に「新民説」の「論権利思想」と「論義務思想」では、「権利思想においてはただ私が私に対して義務を尽くすべきだけでなく、実は一人の個人が一つの団体に対して義務を尽くすべきである」とし⁹⁴⁾、文明開化の今日、国民は権利があると共に、義務があると述べている⁹⁵⁾。さらに彼は、「合群」は「利己」と「利他」の両者を結合するものであるが、実は「公益と私益は合一しないだけでなく、往々にして八、九割相衝突し」、そのため社会に利するように個人の利益を犠牲にしなければならず、将来に利するように現在の利益を犠牲にしなければならぬと述べている⁹⁶⁾。こうした思想は梁啓超が再三強調するいわゆる「公德」思想の具体的延長である。

明治精神について、松本三之介は「明治精神の骨格をなす特徴として、つぎの三点を挙げておきたい。それは第一に国家的精神であり、第二に進取の精神であり、そして第三に挙げられるのは武士的精神である」と概括している⁹⁷⁾。明治という時代に身を置いた梁啓超も「外交」について論述する時、まさに「国家思想」、「進取冒険精神」と「尚武精神」という3点から論

述をした。梁啓超は、中国には部民がいて、国民がない。部民と国民の区別は野蛮と文明の区別でもある。中国の最大の危機は国家思想がないことである。国家思想とは、個人に対して国家のあることを知り、政府に対して国家のあることを知り、他族に対して国家のあることを知り、世界に対して国家のあることを知るべきことであるとする⁹⁸。「国家は、対外の名詞である。もしも世界中に1つの国しかなければ、国家の名前は成り立たない」と述べている⁹⁹。世界中にさまざまな国が存在している以上、自国と他国の区別があるのは当然である。生存競争と自然淘汰の法則によって、国家と国家の間の衝突は不可避である。国家を立てるのは、国と国の間の衝突に対処するためである¹⁰⁰。

梁啓超はヨーロッパが中国より強大であることについて、その原因はさまざまであるが、「進取冒険の精神に富む」のが根本的原因であると考えた¹⁰¹。西洋の拡張に対して、梁啓超は自然競争の必然的結果であると考え、「文明国が野蛮国を統治するのは、生存競争と自然淘汰の法則によって受けるべき権利である。文明国が野蛮国の民を開化するのは、倫理的な義務である」と述べている¹⁰²。つまり、進取冒険精神は、国が不敗の地に立ち、強大になる要素の一つである。梁啓超は、文明が軟弱であれば、たとえ野蛮の武力にも抵抗できず、国家の独立と文明を守ろうとするならば、尚武精神は必須であると考えている¹⁰³。これについて、梁啓超は「自由書・祈戦死」において、東京上野で、市民が兵士を壮行するとき、プラカードの上に「祈戦死」と書かれているのを見て、びっくりさせられた¹⁰⁴。「日本は区々たる三島で、その興りもわずが三十年で、我が中国に打ち勝ち、威厳を得て、覇を定め、厳然としてアジアに立つのは、ただ尚武だからである」と述べ、尚武は「日本魂」であり、「日本魂」は「武士道」であるとする¹⁰⁵。「祈戦死」という文章を発表した数年後の1904年、「中国之武士道」という著作で、梁啓超は中国民族の尚武でない性格の改造を望んでいる¹⁰⁶。また、「今日もっとも重要なのは、中国魂を作り出すことである。中国魂とは何であるか、兵魂である。魂のある兵士がいればこそ、魂のある国であると言える」と述べている¹⁰⁷。概括して言えば、梁啓超の新民思想は個人の独立と国家の独立を出発点とし、かつ公德を新民の理論根拠として論述を行っており、その最終目的は民族主義（国家主義）の中国を建設することであった。彼は「今日中国を救おうと思うなら、ただ民族主義の国家を建設するだけであり、他の方法はない。世界中の最大民族としての中国は、もしも生存競争と自然淘汰の法則に適應する国家を建設できれば、世界の第一帝国の名称は、どの国が奪えるのか」と述べている¹⁰⁸。したがって、梁啓超をナショナリストと称することができる。

5. 伝統への復帰

「論公德」は梁啓超の新民思想における綱領的文章である。その一年半後（1903年）に「論私徳」が書かれた。これは形式的には「論公德」を補完するものだが、その主旨は明らかに変

化している。この変化は、彼の政治観念の変化とある程度関連しているが、思想的角度から見れば、これは彼が西洋文明を摂取し伝統を変えるという主張を変えて、西洋文明を捨て伝統に回帰することの始まりであったと言える。

「論私徳」では、梁啓超は、数年来西洋思想は輸入されたが、中国の腐敗した社会には定着できず、平等思想の輸入によって結局国民は義務を捨てているとして、競争思想の輸入は結局内乱を導き、権利思想の輸入は公益の無視を導いたと指摘する¹⁰⁹⁾。彼は、私徳と公德は対立するものではなく、公德は私徳の延長であり、世の中にはたしかに私徳が良く公德が不完全な人がいるが、決して私徳が汚く公德が良い人はおらず¹¹⁰⁾、したがって国民を造ろうとするならば、西洋思想の輸入だけでは達成できないと述べている¹¹¹⁾。このように梁啓超は転じて私徳の重要性を強調する。彼は、「国民を造ろうとするならば、必ず個人の私徳の養成を第一義とし」、中国社会を繋ぐことができるものは、ただ我が祖先から伝えられた固有の旧道徳だけであると述べている¹¹²⁾。

表面的に見れば、これは梁啓超の思想の重点が公德から私徳に転換したようにみえるが、実は彼の思想全体の変化を表している。その結果、西洋文明の中国に対する重要性と必要性を否定した。梁啓超は、今日の世界には二大文明体しかない、一つは西洋文明であり、もう一つは中国を代表とするアジア文明であると指摘する¹¹³⁾。彼は、「中国文明はギリシャ、ローマよりもはるか以前に発生し、二千年来、中国の制度文物は燦然と大地に照り輝いている。東アジア諸国は我が国の文化を帯びているだけではなく、例えば羅針盤、火薬、印刷の三大発明は、すべて支那から欧州に伝えられた」と述べている¹¹⁴⁾。新民思想の論述においても同様である。彼は、新しい国民を造ろうとするならば、古い思想を徹底的に破壊し、西洋の思想を輸入しなければならないと述べる一方、民を新たにするのは伝統を完全に捨てるのではなく、「(中国が)数千年来、アジア大陸に立っているのは、その備えている独特な性格に広大、高尚、完璧的なものがあり、明確に他族と異なるものがあるからである。我々はこれをしっかりと保存して、失わない」ことが必要であるとする¹¹⁵⁾。梁啓超の新民思想の最終目的は外国との競争である。しかし西洋の進取冒険思想の輸入を望むと同時に、彼は「張博望班定遠合伝」(『新民叢報』第8号、22号)、「中国殖民八大偉人伝」(『新民叢報』第63号)、「祖国大航海家鄭和伝」(『新民叢報』第69号)及び「中国之武士道」などでは、伝統に固執している。その趣旨は、中国人が従来からこの精神(尚武と進取冒険)に乏しくないことを証明しようとするものであった。彼は、支那人種の侵略史を読んで、東洋西洋の人々は肅然と驚かないわけにはいかないと述べている¹¹⁶⁾。また彼には「民族外競史」を書く計画があり、その目的は「我が祖先の種々の武徳」を表彰することであった¹¹⁷⁾。

1912年、梁啓超は亡命生活を終えて中国に戻り、「中国前途之希望与国民責任」を著した。彼はここで、中国国民は強靱な品格を備え、数千年来平等の理想を尊び、かつ独立自尊の精神を持っており、春秋戦国時代から尚武の気風もあった、近代に科学が一時的に衰微したとはい

え、中国人の智慧が西洋人に及ばないわけではない、西洋思想の泰斗であるホッブズ、ロック、ルソー等の思想を二千年前の中国先哲はすでに詳述していたと述べている¹¹⁸⁾。のちに、彼は「中国道德之大源」で、中国国民の悪い根性を強調するのは余計な心配であり、中国は強靱で良い国家性質を持っており、現在やるべきことはこの精神を大いに発揚させることだけであると述べている¹¹⁹⁾。西洋の新思想追求をめざしていた梁啓超は、伝統の原点に戻ってきたことになる。

6. 新民思想の理論的迷走

中国国民の性質は、「五四運動」時代まで中国知識人の研究すべき課題になっていた。梁啓超は近代中国の問題の所在を鋭く観察する一方、「新民」について多くの文章を著し、民を新たに様々な提案を行った。しかし現実的な問題を解決できなかった。この点を2つの側面から分析してみよう。

第一。梁啓超の新民思想に対しては、当時すでに多くの疑問が出された。『浙江潮』第8号の飛生の署名のある文章は、「理論上、新しい民がいれば、必ず新しい政府がある。しかし事実上、新しい政府があって、はじめて新しい民が得られる」と述べ、梁啓超の新民思想は因果関係が逆であると指摘した¹²⁰⁾。つまり当時の社会でまず改造すべきものは国民なのか、それとも政府なのかということであった。これは梁啓超にとっては難解な問題であった。梁啓超は中国国民の性質を批判する際に、中国国民が墮落した原因を5つ挙げている。(1)中国国民はずっと専制政体下にあった。(2)近代まで歴代君主は国民の士気を抑えつけた。(3)中国は何度も敗戦に挫折した。(4)国民の生活がひどく苦しい。(5)中国の学術は人心を救えないの5つである¹²¹⁾。しかし、飛生の言う「簡単な方法」(革命)に対して、梁啓超はそれを認めないとする。彼は根本的な方法は徳育であると考えていた。さらに、西洋思想を輸入しても、国民の改造は、一朝一夕には達成できず、国民教育が大いに興った後にはじめて実現できるとした¹²²⁾。それでは「国民教育」とは何か、梁啓超は解答しなかった。梁啓超の「新民」の目的はもともと国民の性質を改造することである。ここで、彼は国民の性質を改造する前にまず国民を教育しなければならないと述べた。そうすると、新民思想の意義はどこにあるのであろうか。

「新民説」の最終節「論政治能力」で、梁啓超は、「我が国は黄帝から数千年にわたって国を建てた。だが、適当で有機的で完全な秩序があり、道理にかなない、発達した政府をたてることはできなかった。その原因はどこにあるのか。一言で言えば、政治の能力がないためである」と述べ¹²³⁾、再度中国が良い政府でないのは国民に政治能力がないためであるとした。1907年の「政聞社宣言」では、「一般国民の政治的智慧和増進し」、「その政治的能力を養成」することを主要任務として、「政聞社」を作るとした¹²⁴⁾。この考えも、新しい道徳を用いて新しい国民を造るとする新民思想から明らかに逸脱していた。

第二。梁啓超は新民思想を独立、公德、進取冒険、国家主義等の理論から構成されるとしな

がら、これらを道徳の範疇としていることである。この矛盾について、「徳育鑑序例」(1905年)及び「教育応用的道徳標準」(1922年)で自ら修正を行っている。例えば、「私は道徳基準には少なくとも3つの条件があると考えている。1つは、道徳は永遠であること、2つは、道徳は普遍的であること、3つは、道徳は共通のことである」と述べている¹²⁵⁾。つまり、梁啓超は西洋の新道徳を探し求めたが、ついに道徳が普遍的なものであることに気づいたのである。梁啓超の言う国家の独立や国家主義は、中国が当時達成しようとした目標であり、もし道徳観念とするならば、明らかに妥当ではない。

おわりに

中国の伝統社会は、西洋の衝撃によって、崩壊した。いかにして中国が西洋の侵略を免れ、強国となるかは、その時代の知識人共通の関心であった。しかし、「洋務運動」と「戊戌変法」の失敗は、多くの思想家を新たな考えに導いた。梁啓超はこの時期のもっとも代表的な人物である。彼は政治学、法学、経済学、史学、文学、哲学、地理学などについて探求し続けていた。新民思想は彼の政治思想のピークであり、近代中国にも大きな影響を与えた。

20世紀最初の20年に、梁啓超が提出した国民の性質を改造する新民思想は、国民教育と社会を変革する指導的思想となった。1918年、毛沢東が湖南省長沙で「新民学会」を組織したこと、また魯迅、陳独秀らが啓蒙運動の任務は国民の性質を改造することにあると主張したことなども、明らかに新民思想の影響を受けたものである。これについて、「新文化運動」の指導者の一人である胡適は「四十自述」で次のように評価している。「私は梁先生の無窮の恩恵をこうむった。今追想すれば、特に二つの点にある。第一は、彼の『新民説』であり、第二は、彼の『中国學術思想變遷之大勢』である。梁先生は自ら『中国之新民』と号し、また『新民子』と号し、そして彼の雑誌も『新民叢報』と言われた。『新民』の意義とは、中華民族を改造し、衰弱で多病の民族を改造し新しく活潑な民族となさせることになる」¹²⁶⁾。1929年1月19日、梁啓超は北京で逝去した。梁啓超が新民思想を提出してから27年後のことであった。思想界は彼を哀悼した際に、新民思想を彼の一生中最大の思想貢献として評価していた。

戊戌変法時期において、梁啓超はすでに「民智」を開くという主張を提出したが、変法維新の重点は旧官僚体制を変革することにあった。新民思想の創立は、梁啓超の思想が従来の改良主義から近代的思想に転換したことを示している。新民思想の形成と展開は、明治期の文化と深くつながりがあり、中でも、福沢諭吉の文明観、独立精神及び「公德」「私徳」思想は、梁啓超が新民思想を築いた理論的基礎であった。第一節「叙論」(1902年2月8日)から最後の節「論民気」(1906年1月9日)まで、「新民説」の完成には4年間を要した。この間、梁啓超の政治観念の変化につれて、彼の新民思想も絶えずに調整されていた。しかし、胡適の言ったように、梁啓超の新民思想の理念は、西洋の思想と道徳を取り入れて、中国国民の性質を改造

し、国家主義の新中国を建設することにあった。

近代において、西洋文明は中国が探し求めている目標であった。前述したように、梁啓超は西洋思想を同時代のいかなる中国人よりもよく吸収した。しかし、梁啓超は最後には私徳が国民の性質を改造する主要な役目を果たすものであるとした。それは彼の思想は伝統に復帰し始めたことを示している。また、まず国民の性質を改造すべきであるかそれともまず専制制度を変革すべきであるかという面で、梁啓超は論理的矛盾に追い込まれていた。梁啓超は新民思想を創立したとはいえ、真に中国に適応する国民の性質を改造する実施案を見つけることはなかった。

<注>

- 1) 梁啓超は妻に送る手紙の中で、「私はここで新聞社を創設した（来月十一日に刊行する予定）」と述べている（光緒二十四年十月二十七日付「与蕙仙書」、丁文江、趙豊田編『梁啓超年譜長編』、上海人民出版社、1983年8月、169頁。以下「長編」と略す）。つまり、『清議報』は光緒二十四年十月に創立され、同年十一月十一日（1898年12月23日）に発刊した。
- 2) 『時務報』は旬刊であり、1896年8月9日（光緒二十二年七月一日）に創刊された。該誌の趣旨は国民の耳目と喉舌となすことである（「論報館有益於国事」、「文集」第一集、92頁）。『清議報』は戊戌变法が失敗した後創刊されたが、だいたい『時務報』の趣旨を受け継いだ。
- 3) 『清議報』叙例、『飲氷室文集』第一集、雲南教育出版社、2001年8月、163 - 164頁。以下「文集」と略す。
- 4) 『清議報』一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴、『文集』第二集、755頁。
- 5) 「論報館有益於国事」、「文集」第一集、92頁。
- 6) 「本報告白」、1902年2月8日付『新民叢報』第1号。
- 7) 「中国」という言葉が示すように、中国は世界の中心、文化の本源と考えられた。中国を「上国」といい、中国の朝廷を「天朝」と呼ばれた。
- 8) 「蕞爾」はちっぽけである。日清戦争に敗れた後、中国の知識人は、例えば康有為、梁啓超ら、依然としてよくこの言葉を用い日本を称した。
- 9) 「公車」は「拳人」を指す。1895年4月17日、日本と中国との間に「下関条約」が結ばれた。同年5月2日、康有為は北京で「会試」を受験していた各省の拳人に呼びかけ、1300余人の連名で上書し、直ちに变法を行うよう請願した。こうした情勢下に、康有為と梁啓超を指導者としての变法維新派は登場した。
- 10) Hao Chang, *Liang Chi-chao and Intellectual Transition in China(1890-1907)*. Harvard University Press, 1971. p.149
- 11) 戊戌变法失敗直後の1898年9月21日、梁啓超は日本公使館に避難した（林権助述、岩井尊人著『わが七十年を語る』、第一書房、昭和10年3月、93頁）。のちに、1898年10月3日、彼は日本の大島艦に乗って、天津から日本に行った（「大島艦回航ノ件」、外務省編『日本外交文書』（三十一）昭和29年9月、670頁）。
- 12) 梁啓超は手紙で妻に、「ここでの住所と生活費をすべて日本政府が提供している」と述べている（光緒二十四年十月二十七日付「与蕙仙書」、「長編」、169頁）。
- 13) 「伊藤侯論支那」、1898年12月23日付『清議報』第1号。
- 14) 張元済「戊戌政变的回憶」、『戊戌变法文献彙編』（四）、鼎文書局、民国62年、323 - 329頁。
- 15) 彭沢周「伊藤博文と戊戌变法」、『歴史学研究』第406号。
- 16) 「梁啓超書ヲ大隈伯ニ致シテ清皇ノ為メ救援ヲ乞フノ件」、『日本外交文書』（三十一）696頁。
- 17) 「政変原因答客問」、「文集」第一集、107頁。
- 18) 狭間直樹『『新民説』略論』、『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』、みすず書房、1999年、80頁。
- 19) 「読『日本書目誌』書後」、「文集」第一集、156頁。
- 20) 「論学日本文之益」、「文集」第三集、1372頁。
- 21) 同上論文、「文集」第三集、1373頁。
- 22) 「東籍月旦」、「文集」第三集、1374頁。

- 23) 前掲書、p.143
- 24) 吳其昌「先師梁任公別錄拾遺」、『文史資料選編』第 36 輯、北京出版社、1989 年、76 頁。
- 25) 「中国積弱溯源論」、「文集」第二集、674 - 678 頁。
- 26) 「論中国国民之品格」、「文集」第二集、702 頁。
- 27) 同上論文、「文集」第二集、702 - 703 頁。
- 28) 同上。
- 29) 「新民説・叙論」、「文集」第一集、547 頁。
- 30) 同上論文、「文集」第一集、550 頁。
- 31) 同上。
- 32) 同上。
- 33) 「『清議報』一百冊祝辞並論報館之責任及本館之經歷」、「文集」第二集、753 頁。
- 34) 「論學術之勢力左右世界」、「文集」第一集、288 頁。
- 35) 松本三之介『日本政治思想史概論』、勁草書房、1975 年、143 - 144 頁。
- 36) 福沢諭吉「文明論之概略」、『現代日本文学大系』(2)、筑摩書房、昭和 60 年、8 頁。
- 37) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、84 頁。
- 38) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、9 頁。
- 39) 同上。
- 40) 同上。
- 41) 同上。
- 42) 「文明論之概略」、『現代日本文学大系』(2)、10 頁。
- 43) 同上。
- 44) 「自由書・文野三界之別」、「文集」第四集、2254 頁。
- 45) 「国民十大元氣論」、「文集」第二集、658 頁。
- 46) 同上。
- 47) 同上。
- 48) 「福翁自伝」、『福沢諭吉全集』第七卷、岩波書店、昭和 46 年、167 頁。
- 49) 「物理学之要用」、『福沢諭吉全集』第八卷、51 頁。
- 50) 「福翁百余話」、『明治文学全集』8、筑摩書房、昭和 41 年 3 月、231 頁。
- 51) 「文明論之概略」、『現代日本文学大系』(2)、95 頁。
- 52) 福沢諭吉「学問のすすめ」、『日本の名著』(33)、中央公論社、昭和 44 年 9 月、62 頁。
- 53) 「十種徳性相反相成義」、「文集」第二集、691 頁。
- 54) 「国民十大元氣論」、「文集」第二集、659 頁。
- 55) 「十種徳性相反相成義」、「文集」第二集、691 頁。
- 56) 同上。
- 57) 「新民説」、「文集」第一集、590 頁。
- 58) 同上論文、「文集」第一集、591 頁。
- 59) 和田博徳「中国における福沢諭吉の影響」、『福沢諭吉全集』第十九卷附録、岩波書店、昭和 46 年 4 月。
- 60) 「論独立」、「文集」第二集、716 頁。
- 61) 「十種徳性相反相成義」、「文集」第二集、692 頁。
- 62) 「新民説・論合群」、「文集」第一集、595 頁。
- 63) 「新民説・論公德」、「文集」第一集、554 頁。
- 64) 同上。
- 65) 「新民説・論公德」、「文集」第一集、555 頁。
- 66) 同上。
- 67) 「新民説・論公德」、「文集」第一集、556 頁。
- 68) 「文明論之概略」、『現代日本文学大系』(2)、38 頁。
- 69) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、51 頁。
- 70) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、49 頁。
- 71) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、19 頁。
- 72) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、18 頁。
- 73) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、41 頁。
- 74) 同上。
- 75) 「敬告留学生諸君」、「文集」第三集、1371 頁。
- 76) 「新民説・論公德」、「文集」第一集、556 頁。

梁啓超の「新民」の理念（盧）

- 77) 同上。
- 78) 「新民説・論新民為今日中国第一急務」,「文集」第一集、547 頁。
- 79) 「中国積弱溯源論」,「文集」第二集、671 - 673 頁。
- 80) 「新民説・論新民為今日中国第一急務」,「文集」第一集、547 頁。
- 81) 同上論文、「文集」第一集、548 頁。
- 82) 「学問のすすめ」,『日本の名著』(33)、55 頁。
- 83) 「文明論之概略」,『現代日本文学大系』(2)、30 頁。
- 84) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、28 頁。
- 85) 同上論文、『現代日本文学大系』(2)、31 頁。
- 86) 「新民説・論新民為今日中国第一急務」,「文集」第一集、548 頁。
- 87) 同上論文、「文集」第一集、549 頁。
- 88) 「論民族競争之大勢」,「文集」第二集、787 頁。
- 89) 「新民説・論新民為今日中国第一急務」,「文集」第一集、549 頁。
- 90) 「新民説・論国家思想」,「文集」第一集、557 頁。
- 91) 「新民説・論新民為今日中国第一急務」,「文集」第一集、549 頁。「民族主義」は英語「Nationalism」の訳語であり、また「国家主義」と訳される。多くの場合には、梁啓超はこの 2 つの概念を区別せずに使っている。
- 92) 「新民説・論合群」,「文集」第一集、596 頁。
- 93) 「十種徳性相反相成義」,「文集」第二集、695 頁。
- 94) 「新民説・論權利思想」,「文集」第一集、570 頁。
- 95) 同上論文、「文集」第一集、613 頁。
- 96) 「進化論革命者頡頏之学説」,「文集」第一集、423 頁。
- 97) 松本三之介「明治精神の構造」,51 頁。
- 98) 「新民説・論国家思想」,「文集」第一集、556 頁。
- 99) 同上論文、「文集」第一集、557 頁。
- 100) 同上。
- 101) 「新民説・論進取冒險」,「文集」第一集、562 頁。
- 102) 「張博望班定遠合伝」,「文集」第四集、2021 頁。
- 103) 「新民説・論尚武」,「文集」第一集、615 頁。
- 104) 「自由書・中国魂安在乎」,「文集」第四集、2273 頁。
- 105) 同上。
- 106) 「中国之武士道序例」,「文集」第四集、2151 頁。
- 107) 「自由書・中国魂安在乎」,「文集」第四章、2274 頁。
- 108) 「論民族競争之大勢」,「文集」第二集、802 頁。この文章は『新民叢報』第 2 - 5 号(1902 年)に掲載された。
- 109) 「新民説・論私徳」,「文集」第一集、627 頁。
- 110) 同上論文、「文集」第一集、622 頁。
- 111) 同上論文、「文集」第一集、630 頁。
- 112) 同上。
- 113) 「論中国學術思想變遷之大勢」,「文集」第一集、217 頁。
- 114) 「論中国人之品格」,「文集」第二集、701 頁。
- 115) 「新民説・積新民之義」,「文集」第一集、550 頁。
- 116) 「論中国国民之品格」,「文集」第一集、701 頁。
- 117) 光緒三十四年四月七日「致蔣觀雲先生書」,「長編」,347 頁。
- 118) 「中国前途之希望与国民責任」,「文集」第二集、825 - 833 頁。
- 119) 「中国道德之大原」,「文集」第四集、2335 頁。
- 120) 「答飛生」,「文集」第三集、1601 頁。
- 121) 「新民説・論私徳」,「文集」第一集、623 - 626 頁。
- 122) 同上論文、「文集」第一集、630 頁。
- 123) 「新民説・論政治能力」,「文集」第一集、642 頁。
- 124) 「政聞社宣言書」,「文集」第四集、2237 頁。
- 125) 「教育応用的道德公準」,「文集」第六集、3338 頁。
- 126) 胡適『四十自述』、上海亞東図書館、民国 24 年、105 頁。

主指導教員(井村哲郎教授) 副指導教員(国谷知史教授・芳井研一教授)